
病みつきセイバー

勳b

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

病みつきセイバー

【Nコード】

N5121Z

【作者名】

勲b

【あらすじ】

病みつきシリーズ第11弾！！

祝日だというのに制服姿で彼の家に訪ねるセイバー。

そんな彼女の思惑とは――

オリ主×セイバーです

時間軸は気にしないでください

（前書き）

病みつきシリーズ初の形月シリーズです。

朝、俺は起きて何時ものように朝食を作る。

俺しかない家には不釣り合いな量の朝食を――

朝食を作り終わると同時にチャイムが鳴る。

……何時もと同じ時間だな。

俺は玄関に向かい扉を開けた。

「おはようございます」

そこには、俺が通っている学校の制服を着た彼女――セイバ
ーがいた。

セイバーはここ最近毎日のように我が家に訪ねてくる。

俺が学校の時も俺の家にて、夜になると士郎の家に帰る。

最近では帰る時間も長くなり、何もない日は1日のほとんどを我が家で過ごしている。

「おはようセイバー、朝食出来てるよ」

「そうですか、では早速いただきましょう」

俺はセイバーを家に入れると食卓に着く。

—— 最近は毎日この調子だ

まあ、誰かが傍にいるのは嫌じゃないけど。

——
「おかわりをお願いします」

そう言って茶碗を差しだしてくるセイバー。

「わかったよ」

やれやれと言った感じで応えて俺はセイバーの茶碗を手にする。

「今日は何処かに出掛けないのですか？」

唐突に聞いてくるセイバー。

今日は祝日のため学校は休みだ。

「予定はないし、家にいよかな」

祝日なのに予定がない。

寂しい人間だな、俺。

「それでしたら、デートとやらに行きましょう」

デート？

俺が理由を聞こうとするとセイバーは口を開く。

「勿論、貴方は付いて来てくれますよね。

私が誘ってるんですから、貴方が断る理由が無い。

デートとは彼氏彼女の関係にある者達が行くものなんでしょう？
でしたら、私達は行くにふさわしい場所ではないですか。

私達のような好きあつてる者達が行くべき場所なんでしょう。
ですから、貴方も来てくれますよね。

最も貴方の優先順位は私がトップなんでしょうから、予定があつてもそれを断りますよね」

……どうやら、デートは強制らしい。

行くつつつても……

「デートに行くとしてもさ、何処に行くの？」

「何を言ってるのですか、デートに行くに決まっています」

……えっ？

セイバーは真面目な顔つきで俺の目を見ながら言う。

「なあ、セイバー」

「何ですか？」

首を傾げながらも真っ直ぐ俺の目を見るセイバー。

不覚にも可愛いと思ってしまった。

「デートって何なのか知ってるか？」

「好きあつてる者達が行く場所のことでしょう」

「……どんな場所か知ってるか？」

「知りません。」

ですが、私は貴方に全てを委ねてますから不安ではありません。
私は知りませんが貴方なら知っていると信じました。
ですので、全て貴方にお任せします」

……なるほど。

まあ、セイバーの口からデートなんて単語が出たことに軽く驚いたけど、やっぱり知らないか。

「セイバーはデートを何処で知ったの？」

「凜が読んでいる雑誌です」

雑誌を読んでだいたいは理解した……って感じかな？

「いいかいセイバー、デートっていうのは場所じゃないんだ」

「なっ！ それではデートに行けないじゃないですか！？」

「デートってのはね、付き合ってる者同士の人達が何処かに出掛

けることを言うんだ」

「つまり、私と貴方が何処かに出掛けたらその時点でデートになるんじゃないか」

「……付き合ってる者同士ならね」

「それならば、先ずは何処に行くのか決めましょうか」

セイバーはそれだけ言うと手を差し出す。

「その前にまずはおかわりをください」

「……はいはい」

ため息混じりに返事をしながら、俺はセイバーを見る。

——今日は穏便には終わりそうにないな

そんな不安を抱きながら。

その後、セイバーが制服姿ということで俺も制服に着替え、彼女と共にデートを行うことにした。

といっても、俺もデートスポットだなんて余り知らない。

無難に行くしかない。

つまり――

「ここは遊園地……ですか？」

「まあ、そうだね」

遊園地

カップルが行くなら無難な場所を選んだつもりだ。

といっても、ここは俺の家から少し離れた場所にあり、遊園地といっても小さめだ。

俺は周りをキョロキョロと見回しているセイバーに聞いてみる。

「セイバーは遊園地に来たのははじめて？」

「はい。話は士郎や凜から聞いたことがあります」

……まあ、そりゃそうか。

セイバーは聖杯戦争というのに関わっていたらしい。

らしいと言うのは、それは士郎から聞いたことで、俺がセイバーとこんなふうになる前には終わっていたことだからだ。

……まあ、ゆつくりする暇もなかったんだろうな。

士郎からセイバーのことは軽く聞いている。

かつての英雄だとか
サーヴァントだとか

どれも信じれないものばかりだ。

「遊園地つてのはね——」

でも、全てが本当だと言っのなら——

俺は今ぐらいはセイバーを普通の女性として接してあげたいな。

「次もあれに乗りたいです!」

そう言っつてセイバーが指差したのはジェットコースターだ。

小さい遊園地だからと舐めてかかったら見事にやられてしまった
俺とは違いセイバーは再度乗ろうとする。

俺はベンチに腰掛けながらゆっくりと首を横に振る。

「次は、違うのに乗ろう」

「駄目です。」

貴方は私の言うことを聞いてください。

私の傍で私の言葉だけを聞いてください。

私はあれに乗りたいですから、貴方もそれに付き合ってもらいますよ」

そう言つと俺の手を取り無理やり立たす。

……英雄は我が儘なのが多いのか？

そんなイメージがある。

俺がどうやって断るか考えていると子供の泣き声が聞こえた。

「どうかしましたか？」

「悪いセイバー、少し待ってて」

「……あつ」

俺はセイバーから離れると子供に近づく。

「どうしたの？」

子供は俺を見るとすぐに俯く。

「お母さんとはぐれた……」

……迷子かな

「それじゃ——」

俺は周りを見渡すと係員を見つけた。

……探してあげたいけど、セイバーを待たせるわけにもいかないよな。

俺は係員を呼び、子供を任せ、セイバーの元へと戻った。

「ごめん、セイバー」

「私よりもあの子供のほうが大事ですか？」

俺が口を開くと同時にセイバーは言った。

「……ごめん」

謝罪の言葉を聞くと彼女は再度俺の手を取る。

「次は離しませんよ。」

貴方が私の傍から離れると言うなら、私は貴方の四肢を切り落とすとしても阻止します」

セイバーは真顔で言う俺の手を引っ張っていく。

「貴方は私だけを見てればいい」

セイバーの言葉を聞きながら、俺は彼女に付いていった。

遊園地に来て早数時間、日も落ちかけてきた。

「そろそろ帰る？」

セイバーはそれを聞くと脚を止める。

「まだ帰るには早いのでは？」

「そうんだけど……さ」

セイバーは見た目に反しよく食べる。

そんなセイバーの晩飯を作るのは俺だ。

今から家に帰り、途中でスーパーに寄ろう。

買い物はセイバーにも手伝ってもらおうかな。

セイバーの晩飯を作り終える時間を考えるとそろそろ帰りたい。

「……１ついいですか」

俺はセイバーの方を見る。

「最後はあれに乗りたいです」

そう言ってセイバーが指差したのは――

「これはどういう乗り物なんですか？」

「知らずに乗ろうって言ったんだ」

目の前の席に座るセイバーに苦笑いを浮かべる。

「観覧車は乗ってるだけでいいんだよ。高いところから街を見下ろすんだ」

そう言っつとセイバーは窓ガラスから冬木の街を見下ろす。

「セイバーはなんで観覧車に乗りたかったの？」

何でセイバーは知りもしない観覧車に乗りたかったんだ？

「この間、凜が見ていたドラマにこの乗り物に乗っていたので」

ああ、なるほど。

……待てよ、ドラマで見たってことは――

「何故私から離れるのですか？」

俺がセイバーから少しでも距離を取ろうとしたところを彼女に肩を掴まれた。

「何故私から離れようとしたんですか？」

貴方が私から離れようとする理由がわかりかねますが……」

セイバーは俺の両肩を強く掴むと俺を押し倒す。

やっぱり――！

頭を床に強く打つ。

倒れた俺にセイバーは馬乗りする。

「これで私から逃げられませんね。

貴方は私の言うことを聞いて、私の傍にいればいいのです。

それが、今の私の幸せです。

愛する人が幸せなら貴方も幸せですよ。

私は貴方が幸せなら幸せです。

貴方も私が幸せなら幸せですよ。

私も貴方も互いに傍にいたら幸せですね。

違いますか？」

セイバーはそう言うのと立ち上がる。

「そろそろ地上に着きます」

そう言つとセイバーは倒れている俺に手を差し出す。

「どうしました？」

優しい笑みを浮かべるとセイバーは俺の手を取ると、引っ張る。

「……ありがとう」

「お礼なんて言わなくてもいいですよ。
貴方のためになるなら私は何だってするんですから」

セイバーが言い終わると観覧車の扉が開く。

セイバーが俺の手を取つたまま歩きだす。

「今から行きたいところがあります」

此方を見ずに、黙々と彼女は言う。

「着いてきてください」

セイバーは強く言う。

そんな彼女の言葉に俺は拒否することもできずに、ただ着いていった。

……拒んだら、どうなるかわからないから

セイバーに着いていくと、見覚えのある場所に着いた。

「……」

「大河の道場です」

そう

ここは、士郎の家にある道場だ。

お互いに制服のまま道場の中心に立つ。

「今日、士郎と大河は出かけていて帰りが遅いとのことす」

そう言つとセイバーは何処から取り出した竹刀を俺に向ける。

セイバー……？

俺が口を開くよりも早く彼女は手にしていた竹刀で俺の右手を叩く。

——ッ！

右手に激痛が走ると、俺は両膝を床に着けて彼女を見る。

「セイバー、どうして——」

「私の手を手放した手はどちらでしょうか。
どちらにせよ、貴方には少しきつめのお仕置きをせねばなりませんね。」

彼女たる私の手を手放した罪は重いですよ」

そう言うつと左手も右手同様竹刀で叩く。

「セイバー！？」

両手に走る激痛に耐えながら俺は彼女の名前を叫ぶ。

そんな俺を恍惚とした表情で見ってくるセイバー。

「ああ、貴方のそんな顔も素晴らしい」

そう言うつとセイバーは俺の両頬に手をあて押し倒す。

「貴方の笑みも好きですが、貴方の苦痛に歪む顔も大好きですよ。
貴方がその顔をしていると貴方が私しか見ていないというのが実感できますから。」

……貴方が私だけを見てる
幸福です」

セイバーはそれだけ言うつと顔を近付ける。

「貴方が私以外を見ないようにしないといけませんね」

そう言うつと彼女は動けない俺に無理矢理——キスをする。

「貴方は私以外見なくてもいいんですよ」

セイバーは何を考えてるんだ……？

「私が貴方を正しき道へと導いてあげますから。何も心配はいりません。」

貴方はただ、黙って私の傍に居ればいいのです。私はそれだけしか望みません。

それ以外のことは何も要求しません」

セイバーの考えてることをよくは理解できない。

——でも

「お願いします。」

何時までも私の傍にいてください。

何時までも私の言葉を聞いてください。

何時までも私の手を取っていてください。

何時までも——

私だけを見ていてください」

セイバーの思いはわかる。

「セイバー」

俺は短く彼女の名前を呼ぶ。

彼女はきつと、どうしようもないくらい俺のことが好きなんだろう。

——だったら

「俺はセイバーの傍にいるから」

なるべく優しく言う。

「だから、こんなことやめよう。

こんなことされなくても、俺はセイバーのことを見てるから」

セイバー見たいな彼女に好かれるのは光栄なことだ。

……そう、思っておこう。

「本当に見ていてくれますか」

セイバーは確認するように言う。

「セイバーが俺の傍にいてくれるなら」

俺が言つと彼女は優しく笑みを浮かべ、顔を近付ける。

「でしたら、間違いないですね——」

セイバーは俺と2度目のキスをした。

「私から貴方の傍に離れることはありませんから」

そんな彼女の言葉を聞きながら、俺は彼女を見る——

——軽い後悔を胸にしなから

後日談というか、少し後の話し。

道場での出来事が終わり、自宅に戻るついでにスーパーによった
あとおそめの夕食を作り今は彼女と夕食を食べている。

セイバーの行動がエスカレートするのを防ぐためとはいえ、彼女
に言った『嘘』

『セイバーの傍にいる』

確かに俺はセイバーの傍にいてもいいと思っている。
でも、あんなことをする彼女の傍に居続けれるのかな――

そんな悩んでいる俺にセイバーは茶碗を差し出す。

……まあ、案外傍に居続けれるかもな。

そんなことを思いながら、俺は彼女の茶碗を受け取った。

（後書き）

こんにちはー 勦bでーす

普段はなのはシリーズとめだかボックスの二次を書いています。

病みつきセイバーは前々からリクエストを貰っていたため書いてみました。

……面白かったかな？

正直自信がありません（おい

後日談を見たいという方は教えてくださいね。
気が向いたら書きます（おい

それでは、また貴方と出会えることを願って、この後書きを教えましょうか。

PS 感想とかくれたら嬉しいですよ!!
また、リクエストも常時受け付けております。

次に形月を書くとしたら……桜かな？
ライダーも書きたいし……
キャスターもいいなー
でも、一番はバゼットさん

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5121z/>

病みつきセイバー

2011年12月17日12時57分発行